

「動物の中で小鳥ほど死んだ形の美しいものはない」と荷風は小品「うぐいす」で書いている。「小さな目を閉じ、細い嘴を軽く開き、足を少しつぼめて死んでいるその形は、見るも哀れにいたいたしく、覚えず掌に載せて打眺めた末、庭の土を掘り、篤く葬つてやりたくなる」

戦後のイエロージャーナリズムによつて見るも哀れにいたいたしく、荷風の亡骸のそばには鷗外の「渋江抽斎」のページが開かれたままになっていたとの記述には、少しく救われるものがあつたにしても、まだ温かきの残っているような死体写真をさらけ出された永井荷風は、美しい死を迎えることができなかつたと言つていいだろう。が、しかし、彼、退廃ではなく退廃趣味が好きなだけだつた荷風は、偉大なる仕事を成し得た。東京大空襲のさなか、おそらく日本文学史上最高ランクの文学作品であろう「断腸亭日乗」の浄書本を抱えて逃げまわり、戦火の中を守り抜き、そして死の前日まで書き続けたのであつたから。

荷風の住んだ大久保余丁町の永井邸は敷地千坪の

・ 広大さで、黒塀の冠木門から邸まで見事な前庭を通
・ った玄関があった。それもそのはずで、荷風の父は、
・ 内務省、文部省の官僚を経て日本郵船の要職を務め
・ た資産家であった。大正二年、その前年末に脳溢血
・ で倒れた父久一郎が一月二日に死去し、その莫大な
・ 遺産を相続する。

5
元金には手をつけず、利子や株の配当で暮らすよう
になる。荷風は書く。「読書は閑暇なくては出来ず、
いわんや思索空想また観察においてをや。されば小説
家たらんとするものはまずおのれが天分の有無のみな
らず、またその身の境遇をも、あわせかえりみねばな
らぬなり。行く行くは親兄弟をも養わねばならぬよう
なる不仕合の人は、たとえ天才ありと自信するも断じ
て専門の小説家なぞにならんと思うことなかれ」、
「天分の有無と同等に金銭的余裕がないものは、小説
家をめざさないほうがいい」と。つまり、自分に遺産
がなかったら、文学の世界に身を沈めることはなか
ったかもしれないというのである。

○
そして父が死ぬと、重しが取れたように二月、妻ヨ
ネと離婚し、大正五年二月には、慶應義塾の職をも

辞すのである。そして第二次世界大戦が起こり、やがて、大正九年麻布市兵衛町に購入し二十五年余を過ごした洋館「偏奇館」が三月十日の大空襲で焼失する。そして、終戦となり、生活は一変し、荷風は生活の不安に苛まれる。否、散歩に行くときも手放さなかったボストンバッグには千七百万円の預金通帳が入っていて、それを落とし、木更津駐留の米軍兵士に拾われたのではなかったか、荷風の財産は大した額だったのでは、という人は、戦後の経済の混乱に翻弄される荷風の周辺を書いた、半藤一利の「荷風さんの戦後」を参照されたい。

とはいうものの、荷風に、このとき幸運がやってくる。荷風ブームが訪れるのである。新興出版社からたくさんの本が出版されるのである。荷風は戦後のこの時期、ジャーナリズムをさわがす。それも、荷風ブームの訪れの一助となったのは確かであろうが、荷風をめぐる様々な風評は、マスコミによってもたらされたものだ。荷風のマスコミ嫌い、とりわけ新聞記者嫌いについては、大正三年にまでさかのぼる。漱石が小宮豊隆にあてた次のような書簡が残っている。

る。「社（朝日新聞社）のものが、永井荷風君に会いたいといひます。ところが同君は新聞記者には会わない人だそうです。」

大正九年八月二十日の日乗には、新聞雑誌への執筆拒絶の一文がある。荷風にとって執筆が糊口を塗るためのものではなかつたのである。帰朝後、一躍文壇の寵児となつた荷風を、「パンのために書く必要のない、芸術のために生まれ芸術のために生きてゐる人」と書いた雑誌もあつた。

荷風のそうした境遇は「米相場を知らぬ小説家」という風説を流し、あるイメージが形成されていく。

「我は遂に棲むべき家、着るべき衣服、食うべき料理までもも芸術の中に数えずんば止まざらんとす。進んで我が生涯をも一個の製作品として取り扱わんとを欲す。然らざれば我が心、遂に、まことの満足観ずる事能わざるに至れり」。こう荷風が書いたのは大正五年のことであつたが、彼はその予告どおり「断腸亭日乗」を日々記したが、それと並行するようにジャーナリズムの荷風に対する振舞いは、荷風の一個の製作品としての生涯を打ち砕くように荷風の前に進

- ・ ンでくるのである、彼の死の日まで・・・同君は
- ・ 新聞記者には会わないと漱石が歎じたその朝日新聞な
- ・ のだが、昭和十三年五月五日の紙面は荷風による歌劇
- ・ 「葛飾情話」のニュースをこう報じる。「つむじ曲
- ・ がりが作った歌劇、六区のオペラ館へ」との見出しで、
- ・ 記事中では「気難かし屋のへそ曲がり」と呼ばれてい
- ・ る このときすでに戦後の荷風への温かみのない奇人
- ・ ・変人というレトリックの気配がすでに現れている。
- ・ 文壇ジャーナリズムでは、遠藤周作や江藤淳、石川
- ・ 淳の荷風に対する手厳しい批判が相次ぐ。（なぜか皆、
- ・ 荷風が一時教鞭をとった慶応義塾で学んでいる）
- 12 江藤は書く。「その空間（偏奇館）が消滅した時、
- ・ 荷風の精神は死んだのである。」
- 13 石川は「敗荷落日」で書く。「一箇の老人が死ん
- ・ だ。通念上の詩人らしくもなく、小説家らしくもな
- ・ く、一般に芸術的らしいと錯覚されるようなすべての
- ・ 雰囲気を絶ちきったところに、老人はただひとり、身
- ・ 近に書きちらしの反故もとどめず、そういつても貯金
- ・ 通帳をこの世の一大事とにぎりしめて、深夜の古畳
- ・ の上に血を吐いて死んでいたという。このことはとく

・ に奇とするにたりない。小金をためこんだ陋巷の乞食
・ 坊主の野たれ死にならば、江戸の随筆なんぞにもその
・ 例を見るだろう。しかし、これがただの乞食坊主では
・ なくて、かくれもない詩文の家として、名あり財あり、
・ はなはだ芸術的らしい錯覚の雲につつまれて来たところ
・ の、明治このかたの荷風散人の最期とすれば、そ
・ の文学上の意味はどういうことになるか。おもえば、
・ 葛飾土産までの荷風散人だった。戦後はただこの一
・ 篇、さすがに風雅なお亡びず、高興もつともよろこぶ
・ べし。しかし、それ以後は……何といおう、どうもい
・ けない。荷風の生活の実情については、わたしはうわ
・ さばなしのほかにはなにも知らないが、その書くもの
・ はときに目にふれる。いや、そのまれに書くところの
・ 文章はわたしの目をそむけさせた。小説と称する愚
・ 劣な断片、座談速記なんぞにあらわれる無意味な饒
・ 舌、すべて読むに堪えぬもの、聞くに値しないもので
・ あった。わずかに日記の文があつて、いささか見るべ
・ しとしても、年ふれば所詮これまた強弩の末のみ。書
・ くものがダメ。文章家にとって、うごぎのとれぬキメ
・ 手である。どうしてこうなのか。荷風さんほどのひと

が、いかに老いたとはいえ、まだ八十歳にも手のとどかぬうちに、どうすればこうまで力おとろえたのか。わたしは年少のむかし好んで荷風文学を読んだおぼえがあるので、その晩年の衰退をののしるにしのびない。すくなくとも、詩人の死の直後にそのキズをとがめることはわたしの趣味ではない。それにも関わらず、わたしの口ぶりはおのずから苛烈のほうにかたむく。というのは、晩年の荷風に於て、わたしの目を打つものは、肉体の衰弱ではなく、精神の脱落だからである。市川の僑居にのこった老人のひとりぐらしには、わたしは一灯をささげるゆかりも無い。」

14

この石川の言葉はこのままでは、荷風にとっても石川にとっても不幸である。それ故、追記が必要と思われる。たとえば次のような。「大逆事件の囚人馬車を見たときの思いを随筆「花火」に書いた荷風は、敗戦直後の時代、思想的抵抗者とされていた節もある。石川は大正時代にアナーキズムに関心を持っていて、そういう眼で荷風を見ていたようにも思われる。権力に背を向け、絶対的な自由を希求した荷風に対する敬愛の表現がこのような容赦ない言葉を吐かせた。あの時

代、あのようには毅然としていた荷風が、こんな死を迎えたという、胸の張り裂ける思いが、石川に容赦ない言葉を吐かせたということもできるのではないか」

15

そして、遠藤が書く。「いつもふしぎに思うのだが

『断腸亭日乗』の主人公は三十年にわたって、いつも同じポーズで人生に向き合っている。この人の人生のポーズにはほとんど変化がない。変化があるのは外面的生活であって、彼の内面的生活ではない。しかしこの日記の面白さはそうしたポーズが遂に崩れる時からであろう。空襲によって主人公の孤独な情緒的生活をいつさいを支えていた偏奇館と万巻の書がことごとく燃え上がる場面は「日記」のクライマックスである。その時から小説家としての荷風は衰えていった。晩年の写真は、小説家荷風ではなく、彼の文学を裏切ったひとりの老人のイメージがあるだけだ。」そして、最後にこう断ずる。「年齢をとるのは、実に悲しいことである。」江藤にしろ、石川にしろ、遠藤にしろ、その時までには「断腸亭日乗」の全体を俯瞰して玩読する機会にめぐまれなかったと思われる。

16

さて、遠藤の言う「晩年の写真」とは、新聞や雑

誌に掲載された背広姿に買い物籠（やがてはボストンバッグにかわるが）、下駄履き、丸眼鏡、蝙蝠傘の写真のことであるが、これが奇人・変人、荷風のメルクマールとなつて世に広まっていたのである。昭和二十二年十月二十日の読売新聞には「奇行文豪荷風と語る」「笑い飛ばす癡狂説」という見出しがおどるほどになる。

荷風は昭和三十四年四月三十日に死ぬが、その死の報道は文学者の死としては異様なものであつた。その日の新聞の見出しを拾えば、「荷風日記 『二十九日 祭日陰』で終わる。六十日間『正午浅草』、発病の日まで執着しるす。臨終も孤独のままに、文化勲章作家、永井荷風氏」、
「その生活は人間嫌いで、親類や兄弟とも行き来せず全くの一人暮らしだったが、浅草にはよくゲタバき姿であらわれストリップ劇場の踊り子たちと仲よく遊んだり、二十九年には千七百万円余の銀行通帳入りカバンを落として話題をまくなど奇行がおおかつた。貫いた奇人ぶり、主なき汚れ放題の住居。」あらゆる週刊誌、雑誌、とくに一般紙が荷風の記事で満載であつた。はては、荷風の最期の

写真・死体写真まで、スクープ写真として掲載するのである。

こうしたマスコミを「恥も外聞もなく非人間的で下司根性にみちた態度で徹底的な冒瀆を行なった

蠅」と断じた大江健三郎は「太宰治のようにかなりスキャンダラスな死をとげた文学者にもこれほどの忌まわしい蠅は跳梁しなかった。しかし永井荷風の死には数知れない汚辱の蠅が殺到し、偉大な死者は蠅の群れにおおいつくされた」と書いた。

そうしたなか、網野菊、当時五十九歳は、荷風の死に人一倍驚き、衝撃を受けた。しかし荷風の死を報ずる記事を読んでいくうちに、荷風が長く患うことなく、突然ではあったけれども自然に死んでいった、あれは、あれで、じつはよかったのではないかと思うようになる。「ひとり暮らし」という作品のなかで最後にこう書くのである。「よし子は、荷風氏の死によつて、自分の生死について諦めというか、覚悟というか、そんなものが、はつきり、心についたような気がして、かえって、前よりさばさばした、らかな気持になれたような気がするのであった。」と。

